

発行元: 株式会社アークフラッシュ本部

東京都新宿区百人町2丁目26番9号

<http://www.arc-flash.co.jp>

アークフラッシュされた全国48箇所の老人施設は8年間インフルエンザの発症が報告されていません。

< * > <http://www.arc-flash.co.jp> アークフラッシュ NEWS をダウンロードによりご覧頂けます



気候変動の影響によってマダニ(写真)が生息範囲を変えると、マダニが媒介するライム病が新たな地域へ持ち込まれる。ライム病は人間も動物もともに感染する病気だ。2008年10月に発表された研究によると、地球温暖化は、さまざまな危険な病気の大流行につながる可能性が大きいという。

大阪府は12日、豊中市内の幼稚園で食中毒が発生し、園児46人など計56人が下痢などの症状を訴えたと発表した。全員軽症で、既に回復したという。豊中保健所が原因菌などを調べている。同保健所は、同園の委託で給食施設を営業する日米クック(大阪市)に対し、13日から3日間の営業停止を命じた。関係者によると、食中毒があったのは同市上野西2の豊中文化幼稚園。8日以降に発症しており、同保健所の調査で8日の給食が原因と判明した。同園の給食施設は10日から営業を自粛している。

倉敷市保健所は11日、同市鶴形1の焼き鳥店「焼鶏(やきけい)もも肉倉敷白牡丹」(石井陽資代表取締役)で食事をした20~64歳の男性17人が下痢などの食中毒症状を示した、と発表した。保健所は同店を同日から5日間の営業停止処分にした。重症者はなく、全員快方に向かっているという。男性らは総社市内の会社の同僚で、4日に28人で同店のササミの刺し身や串物などを食べた。検便調査で9人から食中毒菌のカンピロバクターが検出された。

12日午前5時40分ごろ、茨城県常陸大宮市若林の飲食店経営、寺門文男さん(74)方の四男(32)から「家族が息をしていない」と119番通報があった。文男さんを除く家族4人が病院に運ばれ、無職で文男さんの母つるさん(95)が死亡、妻美江さん(65)とめいの麻生幸子さん(33)が一時意識不明となるなど重症。四男も体調不良を訴え、軽症。県警大宮署の調べでは、つるさんに外傷はなく、家族の症状などから食中毒による急性心不全の疑いがあるとみて詳しい死因を調べている。寺門さん方は4人暮らしで、11日夜は麻生さんが訪れ、5人で自宅で食事をしていた。煮物や茶わん蒸し、豆ご飯などを食べ、つるさんは食事後に「気持ちが悪い」と訴えていたという

鳥インフルエンザウイルスの変異による「新型インフルエンザ」の流行に備え、企業が感染予防に向けた行動計画づくりを急ぎ始めた。食料備蓄から自宅待機まで幅広い対策が検討されている。だが、まだ1割程度の企業に止まっており、スペイン風邪以来の深刻な感染になるとして研究者らは大流行(パンデミック)への警戒を呼びかけている。新型インフルエンザの感染による死者は、東南アジアのインドネシア、ベトナムなどで250人を超えている。厚生労働省は被害を抑える対策として昨年、全般的なガイドラインをつくったが、企業からは具体的対策を知りたいとの要望が強く、7月末出した追加案をもとに年内に改訂版を公表の予定。企業はガイドラインをもとに、感染予防の行動計画をつくるとともに、工場の一定期間の停止、自宅待機など人員計画も盛り込んだ「事業継続計画(BCP)」を策定する。流通大手のイオン・グループでは、流行時には(1)レジでの釣り銭の交換をなくし、ウイルス伝播を減らす(2)感染に弱い幼児らが訪れる子供服売り場をまず閉鎖する(3)スーパーでは店内よりも換気のいい店外で商品を販売する一など具体策を取り入れている。一方、日本経団連は企業の流行時の対応策を盛り込んだ提言をとりまとめ、これをもとに対策を練る企業もでていく。薬品大手の大幸薬品(大阪府吹田市)の社員・家族向けのマニュアルは50ページにおよび、手洗いから物資の備蓄、企業への来訪者対応、換気などを解説している。日本ユニシスは「経済界が協力して対策を講じないと成果を出しにくい」として自社が作成した詳しいマニュアルをネット上で紹介した。マニュアルは企業の戦略にも関わるため、公表を控える企業が多いためだ。感染予防商品を扱うサラヤ(大阪市)はうがい、手洗い用品、マスクなどの備蓄が対策の第一歩と指摘。O-157やSARS問題への反省から「時間をかけて十分な準備が必要だ」としている。厚労省は、感染を抑えるには事業所の閉鎖も必要となるが、経済活動をストップさせることはできない、として閉鎖と営業継続でのバランスのとれた企業活動を要請している。感染予防関連の16機関で対策を検討中の医療機器販売の

エルクコーポレーション(大阪市)は、マニュアルなど本格的な準備をした企業はまだ1割くらい、という。感染の危険度への意識が不十分だったためだ。専門家は流行の時期を予測するのは難しいが、流行するのはほぼ確実として早急に対応するように呼びかけている。企業の関心も高まっており、先に大阪商工会議所の開いたセミナーは、定員を上回る130人が参加し、対策の細部を熱心に聞いた。

2008年10月19日、福建省衛生庁によると、今月17日までの間に同省建甌市で手足口病の感染例が113件報告された。うち、3人が死亡している。新華社の報道「手足口病(エンテロウイルス71型)」は今年4月から安徽省阜陽市を中心に全国で爆発的流行が見られ、5月初旬時点で2万5000件の感染例と34件の死亡例が報告されている。手足口病は夏かぜのウイルスによる感染症で、5歳以下の乳幼児がかかり、夏季に流行する。口の粘膜、手のひら、足のうらに小さな水泡ができ、食欲低下や発熱を伴う。現在予防ワクチンや有効な治療薬は見つかっていない福建省衛生庁によると、同省建甌市でではこのほど3件の死亡例が報告されたほか、入院患者22人が報告されている。また同庁はこれらを集団感染ではなく散発的なものとしているが、専門家によると、依然、流行期を脱してはいないという。省および市衛生部門は専門家による感染拡大防止チームを組織し、対策に取り組んでいる。

*** 発行責任者: 株式会社アークフラッシュ本部**
笹川 透

03-5337-7275 FAX 5337-7465 sasagawa@arc-flash.co.jp

過去のアークフラッシュ NEWS はホームページよりご覧になれます。